

「司令、この本は何ですか？」

秘書官である不知火がいつも以上に冷たい目をこちらに向けながら聞いている。  
かなり怒っていることが分かる。

「秘蔵のコレクションです・・・。」

内心焦りながら答えた。

「そうです、司令が隠していたいかがわしい本です。」

「いや、別に隠していたわけではなく、単に他の艦娘の目に触れるのは良くないと思って保管していただけなんだ。」

提督は弁明する

「こういった本を鎮守府に持ち込むのはよくありませんね。」

「確かに仕事場であるここに持ってくるのは良くないと思うが、私も一人の男である以上女性ばかりのこの職場では定期的に発散しないと間違いを犯してしまうかもしれないからそのための抑止力、そう、仕方なく所持しているんだ。」

「ほう・・・では、こういった本がないと発散できないと。」

「そう、間違いを犯さないためには仕方ないんだ。」

もっともらしい理由を付けて納得させようとしている。

「だいたい、こういった本ぐらい持っているぐらいで怒らなくてもいいじゃないか」

男として当然だと反論する。

「怒ってなんかいませんよ」

「別に中身がセクシーなお姉さんに甘える本ばかりだから怒っているわけではありません。」

提督は怒りの矛先に気づいた。

「不知火は風紀が乱れることを警戒しているだけです。他意はありません。」

「それにしても厳しくないか・・・？」

不知火は少し考えてから

「間違いが起こらなければ問題ないですよ？少し待っていてください。」

そう残して不知火は部屋を出ていった。

「あの・・・執務中なんですけど・・・」

5分ぐらい後、何かを手に持って帰ってきた。

「これを付けてください。」

一瞬思考が停止する。

不知火の手の中にあったのは鉄の塊だった。

しかし、ただの鉄の塊ではなく、形が男性器と酷似しているものであった。

「貞操帯です。」

固まっている私に対して話しかける。

そう、知識としては知っているが実物は初めて見た。

「いや、それは知っているんだけど・・・え？付けるの？」

突然の出来事にひどく困惑している。

「もちろん永久に付けろというわけではありません。お風呂に入る時などには外しますよ。」

「でもさすがにそれを付けるのは抵抗感が・・・」

提督は遠慮したいという顔をしている。

「あとはそうですね・・・では、不知火が定期的にシてあげましょうか？」

表情が変わる。

「・・・ほんとに？」

「いいですよ。定期的にシてあげます。」

「手、足、口、胸、ふともも、司令の望む場所で望むだけ出させてあげます。」

かなり悩んでいるようだ

すると、不知火が提督の耳元でささやいた。

「ちゃんと我慢できたら本番も良いですよ。」

その言葉を聞いた提督は首を縦に振った。

「納得していただけたようですね。それでは不知火がお付けしますね」  
下の衣類を脱がすと提督の性器が露わになった。

「付けるのに邪魔なので下の毛も処理しますね。」  
いつの間に取り出したのか不知火の手にはカミソリが握られている。

「えっ！ちょっとまって！」  
「危ないですから動かないでください」  
制止しようとするもすでに剃り始めてしまっていた。

数分後・・・  
「これできれいに剃れましたね。」  
提督の股間は綺麗に毛を剃られた。

「こうしてみるとかわいらしいですね。」  
提督の性器をまじまじと見つめている。

「それでは付けますね。」

カチッ

「これで良し。鍵はこちらで預らせていただきます。」

「やっぱり違和感がすごいな・・・。あ、あの・・・本は・・・」

「こちらの本は処理しておきますのであしからず。」  
提督はがっくりと肩を落とす。  
提督秘蔵の本がすべて没収されてしまった。

「それでは、今日から一緒に頑張りましょう、司令。」  
とても良い笑顔で不知火は言った。